

黒木あるじ
ナビゲーター

一九七六年青森県生まれ。二〇〇九年
年、「おまもり」で第7回ビーケー
ワン怪談大賞・佳作を受賞。『ささ
やき』で第1回「幽怪談美話コン
テスト」で優秀賞を受賞し、二〇
一〇年に『震(ふるえ)』でデビュー。
近著は『終(しまい)』『黒木魔記録』
『掃除屋(クリーナー)』プロレス始
伝』など。山形市在住。

開催日約一ヶ月前から百物語
当日前まで、館内に出現する怪談投稿専門
ポスト。館内の図書館入口に設置され、来館
者からの不思議な体験談の投稿を受け
付ける。投稿された中から黒木氏が厳選し、
当日に参加者に紹介する。紹介された
方には特製ステッカーを進呈。主な材質は木
材、ひょうたん。投函口が狭い。

ふしき ポストとは?



山形市在住の怪談作家・黒木あるじ氏をナビゲーターに迎え、「ひがしね百物語」と称し、怪談を切り口に、その地域にまつわる様々な伝承や歴史などの物語を掘り起こしてゆくプロジェクト。毎回少しずつテーマやアプローチを変え、東根を新たに読み解いてゆく。

ひがしね百物語とは?



第一夜プログラム

第一部 異形のものにまつわるふしき たましいのふしき	
怪異譚蒐集の時間 ふしきポストの投稿の紹介	
日時	二〇一九年八月三十一日(土)一八時~一九時半
場所	まなびあテラス図書館プラウジングコーナー
スタッフ	朗読:白井 司会:松葉
企画:	まなびあテラス市民活動支援センター天野・高橋

2020年5月27日発行

朗読「目のない魚」

東根市の泉郷人に伝わる
不思議な魚の話の朗読と、
それを受けて「神に仕える人」の
話を黒木氏が披露した。

東根市は、いわば「いりぶく」の入り口である。お山の神のお社がある。お社のそばには黒伏山と白森山から集まつた川が流れしており、一番深いところの水は青々として、渾身をまいている。それがどれだけ深いのか誰も知らず、人々はその場所を「すりばち」と呼び、恐れていた。「すりばち」の底にはカツバが住み、人間の足を引っ張るだとか、カツバが底の方で石を回しているからゴロリゴロリと音がするだとか、とにかく薄気味悪い

黒木▼「目のない魚」のモチー
フは、山形県内において珍しいものではない。東根市から出羽

三山を越え、庄内に向かって鳥海山のお膝元・遊佐町には丸池様という池がある。民放のCMなどで取り上げられたこともあり、小さなお社の脇を滝が流れている美しい映像を目にした方も多いと思う。池に様と付くのは、お社や、そこに祀られる御神体ではなく、池そのものが信仰の対象となっていることに由来している。言い伝えでは、この池に住む魚は全て隻眼で、いたずら半分で池に手を突っ込んだり、入水でもしようものならその魚たちと同様、片目を失うと言う。何故同じような話が東根市や遊佐町で聞かれるのかと思われる方もいるだろう。神様に仕えるシャーマンは、世俗の人を見ているものは見えない。異界を見るために人の目があつてはならないという説がある。

実は東根市のすぐ近くの中山町でも、ほんの数十年前までオナカラと呼ばれる女性達がいた。所謂イタコである。イタコとは、口寄せ(※注1)といふ儀式で異界との対話をもたらす巫女として全国的に知られているが、その名はあくまで青森県下北半島だけの呼び名で、東北には呼び名こそ違えど同じ役割を得た巫女達が各地に存在していた。その起源は新潟の瞽女(ごぜ)(※注2)と呼ばれる、盲目の旅芸者とする説もある。東根市や中山町のオナカラと呼ばれる巫女達は、かつて各集落ごとにいたと言ふべき存在であり、現代人から見ると怖いと思うような不思議ごときの存在であり、現代人から見ると隣り合わせでうまく共存してきた事例の一つとも言えるだろう。東北に住む人々は取り分けそ付き合い方が上手だった。

▼さて、かといって恐ろしい目に合わないかと言えばそうではない。前述通り、東北には口寄せ巫女が数多く居たし、神やそれと一緒に機能する、地域になくてはならない存在だった。

黒木氏は浴衣姿で登場。会場には盆提灯が点され、話が終わると静かに鐘の音が響いた。

黒木氏は「目のない魚」のモチーフで、第1回「幽怪談美話コンテスト」で優秀賞を受賞し、2010年に「震(ふるえ)」でデビュー。近著は「終(しまい)」「黒木魔記録」「掃除屋(クリーナー)」プロレス始伝など。山形市在住。

ば鍼灸師や按摩、女性であれば神に仕える巫女の一種として厳しい修業を積み、オナカラになるロードモデルが確立されていた。現在、ハンデがある場合は、視覚特別支援学校に入つて職業訓練を受けるなど、自立への道が開かれているが、昭和中期までの東北には目の不自由な少女が自活する事は少なく、やむにやまれずオナカラの道を選択せざるを得なかつた事もある。オナカラ達は視力を失つたが故に神に仕える道を選んだ、逆説的に言えば、「神に仕えたために視力を失つた」巫女達である。

東根市の黒鳥観音(※注3)などに数多く奉納されている「ムカサリ絵馬」(※注4)は、若くして亡くなつた死者を慰めるため、死後の世界での結婚(死後婚)式の模様を描いた絵画である。この絵馬は、今でこそ簡単な手書きで誰でも奉納が可能だが、昔はオナカラからの託宣が無ければ奉納そのものが出来なかつた。當時の人々にとってオナカラは特別な存在ではなく、当たり前のものとして地域の暮らしに機能して、郊外にある有名なカミサマのところへ地域の暮らしに機能してきた存在であり、現代人から見ると怖いと思うような不思議ごときの存在であり、現代人から見ると隣り合わせでうまく共存してきた事例の一つとも言えるだろう。東北に住む人々は取り分けそ付き合い方が上手だった。

▼さて、かといって恐ろしい目に合わないかと言えばそうではない。前述通り、東北には口寄せ巫女が数多く居たし、神やそれと一緒に機能する、地域になくてはならない存在だった。

普通であれば青ざめるところだと、Bさんは尚も懐疑的だった。普通であれば青ざめるところだりもなく勝手に色々なことをしてしまった。そこで知り合いを頼つて、郊外にある有名なカミサマの住宅、通された居間に祭壇らしきものがあるだけで、想像していたおどろおどろしさも無く拍子抜けしていると、襖がガラリと開いてカミサマが入ってきた。流石に雰囲気に押されて緊張しているBさんに向かって、カミサマが、「あんた死ぬよ。」と言つてきた。

100(地名)に店出すつもり

と淡々と語るのである。普通であれば青ざめるところだが、Bさんは尚も懐疑的だった。予約していた訳だから、当日までに八方手を尽くせば事前調査も可能だろう。場所を言い当てて驚かせて、後は出鱈目を言つたのだ、そのうち数珠を買え壺を買えと言いつ出すに違ひない。彼は、「わかりました。気を付けます」と小馬鹿にした態度で返事をして、じつと見送るカミサマを後に近所に住む大家のおばあさんが出てそれから数日後、いよいよ開店間もなくとなり、厨房で内装の最後の調整などをしていると、暖簾を上げて「調子どうですか?」と声をかけてきた。世間話しながら、彼は何の気なしにカミサマの話をした。「あんまり周りがしつこいから行つてきた、井戸があつて女が死んでるとか、私が店で死ぬって言つて」と

「うちにの裏に、井戸、あるよ。埋めたの」

Bさんは信じていないから、そこでうろたえることは無いが。「この辺は古い町だし、どこに井戸があるても不思議じゃない。適当に言つたって当たるでしょう。でも、そこで女が死んでるっていうのは流石に」と問い合わせても大家さんは何も言わない。十秒が過ぎ、二十秒が過ぎた。いい加減どうしたのかと思い、もう一声かけようとBさんが口を開きかけた時、大家さんが、

「死んでるの。

そう言つて顔を上げるとぽつりと呟いた。

「あのね、私の娘なの。井戸に竹かけて、そのまま首くくつて死んだの」

これを聞いて青ざめたBさんは、大家さんを連れてもう一度カミサマのところにすつ飛んで、全部当たっていた、なんとかしてくれと頼み込んだ。カミサマは、

「そうしたら、井戸のあつた場所に、毎日見舞いに行き、お酒と、あんたのお店で出すものをちょっといいから豆鉢に乗せて、そこに供えて手を合わせなさい。そうすれば、死にはしない。

「だけど、

「そこで長く商売をしない方がいいでしよう。」

そう言われたそうだ。それから毎日、Bさんは店で出す料理とお神酒と共に供えて、かつて井戸があつたという盛り土に、どうか悪いことを起こさないでください、と手を合わせた。それが幸いしたのか、店は無事オープンすることができた。腕が良いと評判になり、お客様が引きも切らず繁盛するようになつた。

そうしてみると人間はだんだん安心してくる。カミサマには早く置んだ方がよいと言われたが、やめるにはどうも惜しくなつてしまふ」とBさんが半笑いで言うと、てっきり一緒に笑つてくれると思っていた大家さんの顔がスッと青白くなつて、それきり何も言わない。どうしたのかと驚いているBさんに大家さんはボソッと、

た。立地も良く常連客もいた。店は軌道に乗っている。お参りを続ければ、このまま騙し騙しやつていいけると思い始めたある日の朝、出勤しようとして、Bさんはベッドから立ち上がりがれなくなってしまった。体中倦怠感に襲われて、寝返りのひとつも打てない。なんとか電話を掴むと、古参のアルバイトに始末を引き継いだ。店は店主都合で閉店にする、予約客にもお詫びの連絡を入れるよう指示して電話を切つてしまらくして、そのアルバイトから電話がかってきた。もしもし、と出た瞬間に「大変です。お店に車が突っ込んで」と言う。違う違うの体で行ってみると、店は居眠り運転の大型トラックが突っ込んで無残な姿になっていた。いつも立っている厨房、カウンターの全てが壊ぎ払われたその店の奥、井戸の手前で車体はぴたりと止まっていた。Bさんは次の店を建てる時にはカミサマの話をしつかり聞こうと思ったという。その後新たな場所に新店舗を構え、幸いそちらも繁盛しているとか。

つけ) 巡業を主な生業とした盲目の女性旅芸人。厳しい徒弟制度で組織された組ごとに各地を回った。最後の瞽女として知られる小林ハルは「記録作成等の措置を講すべき無形文化財」保持者に認定。貴重なその音源はCD化され、現在も販売されている。

※注3 黒鳥観音 慈覚大師の作と言われる十二面觀音菩薩を作り、奉納する絵馬。ムカサリ絵馬の奉納先としても知られる。

※注4 ムカサリ絵馬 未婚で亡くなつた死者の供養として、架空の人物との死後婚を行う様子を描き、奉納する絵馬。ムカサリは花嫁を現す「迎えて去る」を由来とした方言。山形県村山地方を中心に行われた風習で、現在でも県内各地の寺社に奉納されている。

※注5 カミサマ 青森県内における民間の祈禱師、巫女の名称。青森県岩木町赤倉靈場はカミサマ(高次元の存在)が憑いている」と表現する場合があるが、青森県のカミサマはあくまで巫女そのものを示す。

たましきの
ふしぎ

「たまし」にまつわる 不思議な民話の朗読ト

「死者との邂逅」をテーマに

入
y
—

紅花の集

京の旅籠

不しみにし

は死んで

高齢のため

奉公人の
に向かうこ

形にたどり

かしそうに

度と姿を

お姫さん
しい心根に

といふ。こ

正形市双

東町・靈石

時京都と

話を選ん

の姿を見

らくして喪服姿の男性が姿を現した。「どちら様ですか」と尋ねられて、あわてて事の経緯を説明した。この家の□□さんと同級生で、さつきここで顔を見たものですから、としどろもどろに話すと、相手は驚いて言った。
「あなた□□と今ここで会つたと仰いましたか。今そこで会つて玄関に入つてきたと。まさか。今日は□□のお葬式なんです」
予想外の返事に呆気に取られたお互いどういう顔をしていいのかわからぬ。勧められるままに家に上がりさせてもらうと、確かに仏間に棺桶が置かれ、喪服姿の遺族らが狭い部屋にひしめきていた。玄関の革靴の群れは、この弔問客達のものだったのかー。祭壇には、子供の頃の面影を残した同級生の遺影もあつた。
さき外で見た彼が何者だつたのかわからないが、こうやつて呼ばれをからには焼香を上げてやりたいと手を合わせた。その間、恐怖は無く、ただびっくりしたという気持ちだけがあつたといふ。
「この出来事を思い出す度、西日に照らされた玄関のギラギラした革靴が目に浮かぶんだ」と彼は懐かしそうに語るのだった。

曾祖母ではないかと思い当たった。生前は幼かつた母をよく可愛がってくれた、と思い出話をしていた曾祖母。母もきっと喜び勇んで老婆の話を告げた。最初は母も訝っていたが、何度も見たと話すトト無下には否定しなくなり、その後は共に蔵に寝ることになった。やはり老婆は現れて、前より鮮明にすら見える。彼女は急に起きて」と声をかけた。娘に懇意に起こされ、母親が見て一言、「あの人、だれ？」母親の絶叫と共に老婆は消えた。それ以来、子ども達が蔵で寝泊まりすることはなくなり、二度とそこには近づけなくなってしまった。残念ながらこの話を聞いた二〇一三年に、その蔵は取り壊されたという。話を聞いてからほどなくして女性から連絡が来た。

「あの話をした翌日、三歳の娘が夜中に振り起こってきて、何もない空間を指して、あのおばちゃんだれ？なんて言うんですね。もしかしたら、私は話してはいけないことを話してしまったんでしょう？」

